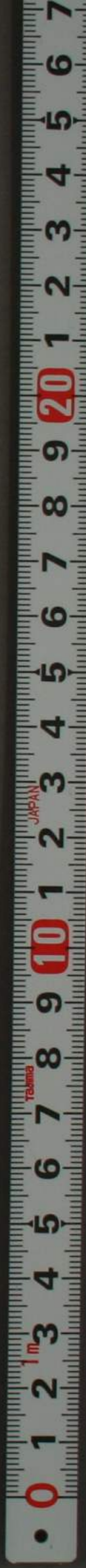




ル 2
3097
4



Red square seal impression in the top left corner of the left page.

Faint, illegible vertical text impressions on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

Red square seal impression in the lower middle section of the left page.



門 2
號 3097
卷 4



日本行紀

第十一篇

上海の記

楊子江の事

上海着岸

街中徘徊

唐人の仔細ニ功者ある事

茶園の事

唐人芝居

質屋の事

早稲田 大學 圖書館
262.5
購 入 券

死人を置く家の支

唐國小児の事

上海旅人賄方の支

戦争の危は望時中間の規則

上海出帆巡見を始る事

空氣の支

琉球島に至る事

支那は就て中間の規則

那霸港着岸の事

四月廿七日香港^{名地}を出帆して臺灣の港に至り
又此所を出る時小雨降九りこのとき杖船の表
は常は數多の漁舟集れりこれを覆さん事を厭
且音楽鉦聲を聞らしめん々為は蒸氣を寛ふし
て出帆せり此年の五月上旬は寒き強く浪あ九
かちあるは「ホーケセ」^{名地}に至らんと此所は
進は故障するものあり是を夜中たりとも取除
くあり此邊の水蒸氣ハ灰色ふして四方くふし
此水蒸氣船の綱具を浸し且船樓を湿し故は諸
島止る事を得む羽を休むる場所を求む是を見

るは寒氣強く人心を病むるに至れり去るる唐船ハ幅湊セリ此唐船ハ眼科家の招牌シヨウの如く大なる眼を畫きたり

五月三日楊子江（小大洋の口）は着岸に此河岸に至る迄ハ海を遠く離れり船を進むとき此水の南方ハアヂアの北西の浪をうくる處あり且三十里の廣き砂底にして船は害ある危き瀬あり我等或人の見出せし諸島を巡行せしは大槪ハ岩にして住民なきと見へし我船ハ逆風強して四時の頃地方を見失ひ曉に至り退潮の

時漸く水四ツト上の深サなる所は錨泊セリ故は晝頃（ツト）スラフェイスラニドは近けり此次日の朝入船セし「ウーソニ」カリ正より上海へハ三十里あり此処は数多船幅湊セリ故に入港の障あり困難して漸く入船する事を得たり此処至て狭く底ハ深ク里ハ此土地ハ黒き泥地あるハ豊地あるや料々として然れとも時々樹藝を大なる菜園あり上海より異國の商館及び白色の橋を見し本船未錨下をよむへとも祝炮の間は直小我國

人法弘の爲に在住する僧の家は走り至れり此
家の法徒の集會する寺の廻りをして唐國の捨
子を養育する処あり爰にて不圖一の諺は適當
なる事あり則諺は曰く神の爲め社を造宮する
は口腹者酒肆を近くは設くと云く此事如何と
あるは此集會する寺と法徒等の住居の間は下
輩の者共の通ふべき妓樓あるはなり

此上海の府は曾て見しる唐國の府は異なるは
石壁にてこれを圍繞し其高三四十尺直立は築
き凡つ三百歩毎は樓門を設けたり又政羅巴諾

州の高館は府外にあらず又真氣ある汚水淺き溝
は充滿して遠近は流れ通ふ且田地近く加之強
敵の勞あるは爲は自然地上は高樹茂り石墨を覆
ふはりの唐の戦は城は近つうをして兵を出し
互は隊を近く寄るを好む是城壁の不堅固なる
を補ふあり異國の住家の前は顯せし如く河は
沿て各構をるは是は英國唐國戦争後の條約は
て極小なり

偶朝は方りて道遙せし所には茂林ありて何れ
も畫くべき景色なり此地一方は一面は稻生し

まゝ一方ハ府壁より我此府中ニ至らん欲を
然し此樓門ハ異國の人を入る事を許さや否と
疑惑セリ

樓門ハ番所有りて賤しき衣を着し不行儀ニ鑑
ふゝる番兵六人あり置置寝るあり腰掛小座
し書記し居るあり或ハ小き頭の烟管にて煙草
を吸居るあり此府内ハ石畳ニ沿ふて十五歩
よ五廿歩の土兵を設けあり然し甚低く炮門の
用を為し難く見ゆ此丘ハ後ニ石を敷きゝる狭
き街あり是ニ添て堤様のもの築きゝる所を遇

穢き街を經てまゝ家の建連りたる街ニ至る
全く北方の唐人の中ハ異國風の家化を好む
ものあり故ニ此処の家ハ廣東より堅固なり且
改羅巴在住人を粗暴ニ取扱ふを見さるし我珍
悦を好み諸品を求むる故ニ店ニ至り丁寧ニ取
扱きたり然れとも諸品は札を下げ記載する
を設置さるし
唐人の細工は巧者にして産物の質物を拵へ廉
價ニ高ふを驚きし上海ハ都て角木竹根草實ニ
て珍しき物を細工するは巧者なり故ニ数多の

店あり懸る女の腕飾を求む是ハ小桃の實にて
唐船の形を刻み穀粒より少き盃を持つ人物を
まへ樓船の窓の用用をるを構實を以て作り
又腕飾の中央は小き胡桃を奇麗に細工し香氣
を貯ふる為と此のとき此物を杖國にてハ至
て高價のものとして實は勞して作るあり
珍しき物を見んと欲し暫時街中を徘徊せし
見をれざる「ナヤコ」即チ茶碗大サ通常よりて園中
毎畝六れを分ち好き景色あり亦池を高き處に
設け又道を縦横に附け天幕を以て小舎様の物

を作りたる處に至る通路とせり此天幕を張り
一中二人あり各異なる腰掛にて煙草を吸居し
里傍に茶を呑む為に設けしる長き臺あり杖此
処にて通常の茶を呑三カ区鈔の名を拂ひし
遠近に樹あり亦天幕を張り其間を盡く庭に岩
塊あり此処に矢を以て白嵐白鳥をと巧に作る
珍しき細工者あり又一人の若き者湿披に油墨
を流し鳥花等の形をなせるを樂に見しり
杖珍しき物を見んとて遠く至りし古く傾き
とる「フ」止社の社は至りし社ハ唐國にて見し

るより相透して幾階も建重祇頂の橋壁ハ丘の
岬崎あり此上の橋ハ二三の砲門あり是ハ極
て背の者よて如斯き重橋ハ是悲ミリタイ此武
方又造営をよし我案内者ハまゆしき衣を着
しとる法徒あり破れとる阜の前又或ハ傾き或
ハ破損し形もなき迄至れる神像あり狹き如
く小き粒よて建重とる低き堂の外ハ市童等遊
居たり此遊ハ我國の「ドミイス」色取る物
を以て遊る
よ似たり然れとも凡百五十の石を以て是ハ
竹を黒くぬり又ハ紅くぬり或ハ紅黒に塗交せ

たす違ひあり我等小児等の中よて自然よ此樂
よ身を入とる者を相對して勝敗をつけ賞を取
らせしうハ彼等茶を以て饗應せり

此橋上よて不意に音楽を聞けり是コニク器ハ
金胴の小鼓大鼓鉢胡弓の音楽あり其処よ至て
見ぬハ廣大なる家よて一生の戯物なり踊りあ
うハの時よ至りて觀人充滿せり又六人の踊り
兒一様ハ神像のよく美麗の衣裳をつけ舞場よ
て上下よ働くる甚速なり他の一人ハ燃る如く
紅くぬり其上よ黒白の横筋を畫きたる顔よて

後ハ樂器の一種を置き踊る者の調子をたたく
且速ハ働かま假聲を以口上を速又時々帷張の
蔭なる音楽方の調をあり早誦子を以て踊もの
を退く是にて一回終るあり我始まりたるを看
さるを悔む此踊ハ唐の争戦にて韃靼明を棄ん
とせる時代を作りたるあり

此戲同ハ他の踊を入たり是ハ愛をへき若もの
「ケートルラヘ」織物の名の衣を掛思ハあるよふを
よて女の側は近づき對話を而して互ハ一笑セ
り亦ハ於て彼若き男穢き舟策の服を抜捨

うハ奇麗なる衣裳よりてまことの形とあるなり
此戲同の次ハ以前ハ等ハき戲をあるせり然共
日稍西ハ傾ハ故ハ全く見るを得ハして馬を
早めぬ路ハ趣けり猶爰ハ附録ハ此戲の趣向を
得るハハ常ハ集會したる芝居功者の人を以て
進の以て多の趣向を得るあり即時ハ戲を作る
人かくの如く為る樂を「ニクソング」と名づく
我ハ等ハく他を逍遙ハたるハヤルタイロハ
人ハ途中にて逢ふ彼ハ畱の周圍にて欄干ある
林ハあるを見たり又爰にて番附ハ且質入

る日を祀したる僧の衣類を箱に盛て又板壺穀鉢コップステック区一角の小さき頭をつけたる小き杖形のものにして食物を口中に持来るものあり是唐人の常は食事椅子机食盤箱其他家具等は用ゆる箸ありの物を都て質屋に運送するを見しり唐人は都て神を尊敬するを薄く神具等も厭はば質屋に送るあり外街の大家まで小児の死體の包納あるを見しり杖も亦同體なれは死を免かぬさるを思ひ恐れて既は堂内に入らんとして止たり此れは葬は他は異なり都て入死をぬは此れは

集めて水葬に海滞在の同属腐れたる死體亦ハ半體ハ魚の餌食とあり損し河に流れたるを見たり

タイロ此名と昔は今馬場に至る馬は都て其主自ら生育せし小馬あり塔より街中の道筋を見知る所の免許にて榜門の開きあり然れとも其榜に登らば天幕にさる如く至れり此時三スクハシテ船の音楽を聞く馬は元疾足なれとも此馬小くして且脚を破り故に敢て駆らさざり然れとも勝れざる馬なれば支那人ゆり来る

門限は城に來れり此時尾を持する唐人は樹尾
かといへる支那人頭の上は圓く髪を立たせ
はもトを入れ凡長三四尺細下けたるをいふ
はへ無作法ある鞞は座は鷹の羽を以て飛行を
する如く腕を動し衆居より此容秋ハ尤愚を顯
ハセリ

上海まで我滞船の間食用ハ當地在苗の異國高
人及び「コンシ」館の旅宿より適宜に送り越せ
り「ラ」ハ羨麗なる祭にて「アメリカ」コンシ
良斯一隊及び英吉利一隊の士官等集會を催せ
り此時紅白の絹にて花及び「カラ」ハ
如く環の

作りたるを以て其間ハ饒り家ハ美味を列杯
上にある食物好き酒を用意し種々の樂を盡せ
り是全く名聞の爲の集會あり此時高人共よ
り貿易の繁昌又上海の幸福を表する爲め使者
を送れり

「アメリカ」ミニストルシメニ止館ヒムハレイ
マルサハ君も亦此の如き名聞の一會を催せり
然れ共此集會ハ我爲ハ樂ミ此少あり此時
無益は十二番の戲を催し是ハ猶種々あるを
附屬せしむ我等ハ是ハ助となりて衣食の後宴

の缺乏を速に補へり
支那の治乱は就て能く聞知し弁知するを自ら敢てせし然れども此騒動にて老體なる者ハ刺殺の慘極あり又先帝及びハ「タルター」此類族ありといへとも勢もあゝ法の行届るもあゝ亦國內乱を避る為め他邦の軍艦を頼むるもあゝ唯黙しばく謀及人の為は虚しき政事を為せり○英吉利の使者蒸氣船「ヘルメス」船号にて諸國商船の為謀及人の頭は約を結んとして北京に至れり此時上海にて鑛炮を備へ若くて支へけれとも

船中の士官及び数人にて防りの杖謂へらく此國往古の風は存るといへとも國乱の為は麥草セさる変なり即ちアメリカの合衆國は變せると同様あらん

爰も譬あり坊家を長く故き儘は捨置く時ハ家傾き坊の形も損を夫の早く開けし國假令他國を遠く隔と雖とも能く開けざる國あゝハ漸くは改易せらぬ終は一大浪にて傾けらるゝなり透々ハ壁を付能く遠慮して建たる家ハ劇甚なる洪水といへとも覆さるを以て老人も死を免

を長命を得又貯ふる所の財寶を保ち自然に沈滞せる事も開明し國士の諸民各其在所によつて生育す

十六日我運送船「シュブレ」号船初の大波よて砂底よ揚げらる且此船の長官「カルノ」フ止る君四人乗の端舟よて凡三十里許流されたり身體寒氣よ疲れ言ふとも能はば我船「シュス」クハニ止へ来るを報せり故小「ミス」スシセ「ハ」直よ助を出る事且高館の祝會を止る事を士官よ命せり然れ共彼運送船ハ幸ひ満潮よ由て浮たり

五月十七日 午後満潮に錨を引ける事の令を「

ムモト止館下やう「テ」キヨ「フ」シ「ハ」此船を支配する士官

支配して十分の船を棄出し又直よ尊き黒色の神像を河に投じ是則法教を廣むる為國々よ人を遺す始めあるべくと推考し我ハ「ス」レ「ハ」深き処に投入たり「ア」メリ「ハ」人ハ都て樂音を以て樂ことせり士官其他ハ旅宿あり此時「英吉利」弗蘭斯「墨利加」の軍船并高船我船の前を通行する時大楯よ多くの旗を引衆人盡く帽子を脱きて帆を祝せり

寺を周環したる法徒の家を過る時此街の閑寂
を祝するは尊き経を法てせり故は詩の音楽を
以て是は回答せり此時風我は向て吹き来る不
意は我烟りおしより黒烟高く突おし此神は供
きるの樂も羨ふばかりあり我考るは此時本船
までも神を祈るの間は人々注意せざるに見へ
たり

河岡等我眼は觸るるものハ都て之を説さるを
得以田の遠近は茂^林あり又多くの村落あり此
村落ハ彼此は直りて小屋連り支那の北方まで

ハ種々の妨あり之を記せさぬハ又再び遊を希
ふ

暫くウーサング^{地名}滞留の後河口は碇泊して
又穀物を船積せんと上陸せり然れ共我船の一
隊皆我等の攻りを待し故は速く船は改れり一
見をるは支那海とハ少の違ひあり是空氣性質
の違ひはて日毎は厚く海上を覆ひ他処よりハ
船を見るを能はば或時ハ霧水面より三四十尺
上りて我船より九一里の隔てたる「ミスシフ」
の「ロム」^{船のミ}の^ミを^て橋^等を^時は^見る^然し^橋の

上端且上の桁ハ霧ニ覆ハレ全く見ルヘからハ
是厚クして白キ霧ナリ斯ノミク霧太陽の上下
を覆ヒ赤キ明暉ニて明ナリ然レ著レキ白霧ニ
て日光の色新レキ「カ」ニ午或ハ羊の乳汁を塊
其色の如キ光ある色ナリ我考ルニ此淡白の目
光ニて國人を養ヒ或ハ害モあるヘ
此処ニ於テ橋上の接橋及ヒ桁を落シ程の恐る
ベキ「テイホ」ニ南東のを凌キたり但レ船を動揺
スルのミニて害ナリ唯我一隊の軍船食物運送
の唐船二船害を受たり則チ一艘ハ彼所ニ吹送

られ又一艘ハ此処ニ沉ミ衆組の庖人宰領役荷
持等凡三十人の支那人鳩の如ク沉ミ悉ク狼狽
して散々ニ橋船ニて頭を歩チ我端舟二艘ニて
此支那人を本船ヘたモけ翌旦「ウーサン」名地ニ
送ルリ○澳門より報モる彼等の仲間ある南方
の國人の没溺セリニ比モ九ハ幸ナリ
廿三日第二番の運送船「カ」フリ号船速ニ錨を下
セリ我ハ「シ」スクハ号船ニ乗リ移タリ「ミス」シ
スヒ山ハ帆の時張リ綱ニて九百ト号船の運送
船「プレ」号船ニ至ルリ軍船「サラト」号船ニ在リ

澳門より琉球島に向け帆を又軍船「ブレイモ
ウ」止も我上海が帆二三日後出帆セリ
廿五日の昼後國を見出セリ此時「プレイ」船を
乗抜けんが為「ミスシス」船「プレイ」船両側は蒸氣フ
レガツ上軍船を備へ互は乗走せり
我等終日武器を用意する暇なく午後に至り
てハ變化自在ならしむるための調練をせり
○砲丸ハ唯野に於て用ひ砲門ハ唯親和の祝の
のミ同らん事を希ふ

今國民は近く情意穩當ならさぬハコムモトレ

官名種々の規則を定め人々を命令を番兵々丸を
込る筒を以て所々配り我等ハ鎮守とあり
又端舟ハ兵糧水丸合薬及ハ航海の道具を用
意し士官及ハ其他役々を命し且信實な組合を
命し猶巖は琉球等の人より物を請るるを禁し
償を少くして船路を取るの目的ハ此前提は寄
る故あり

次日五月廿六日初て國を見る此國ハ稍十里許
りを過て南西の岬ハ海より直に立たる岩あり
一方ハ生ひ茂りたる樹木にて陰れ種々の景色

を頭セリ
是の如く大小の島を日よ二十里見たり是れ「ア
リカリ」島の内あり蓋し我等より十里も隔り
故に住人をいれ別する事を得以「リス」クハ
ハ「ミス」ニス「シ」ピ「山」船先ち「ニス」プレ「山」船ハ「杖
後」續き「カ」フリ「主」船ハ稍遠く航セリ
及後見張の者一船を見出セリ是即ち待居る
類船よりて直き目標を附たり「カ」ラト「山」船る
り我等此よりて祝砲以内忽ち近く来り七時頃
甚廣き那覇の港内よ達し船毎よ二艘の端舟を

出し深淺を測量セリ

暮七時半よ至り錨を下せし頃此島人等新奇を
好みて「ア」メリ「山」大鼓の音響を聴く我船砲
を發せしハ他の舟よりも亦九よ應して發セ
り

日本行紀

第十二篇

初て琉球^ニ至りし記

初て國人^ニ逢ふる

上陸の事

英吉利送人の事

那覇港の事

築城の事

町の事

政府の長官本船^ニ士官見舞として来る事

島中巡見の事

國の形状の事

田畠の事

案内者の事

着里の町の事

旅宿の事

國人實意の事

島の地方の事

廿七日朝^シスクハニ^シ船号へ那霸より端舟二艘

来り町年寄あるハジマ^シ人より牛二足鶏卵百
芋野菜贈来る然まども夫相當の價を出さば
てハ其住人より何品たりとも取へからざる定
也ハ此進物物頭ある^シ人君及び通辯官^シウエ^シ
人君彼の^シハジマ^シは告げ且水師提督^シル^シの
かくりものを渡せし後初て是を請^シ。此日二
人の外一人も海岸に来らば只二人端舟にて港
内を遊へり其の時其周邊は石樹を見たり海中
の窟は小さい空色の魚數多あるを見て幸^シて是
を僅^シ得たり此時既^シ魚死^シて美色を失ふを

知る土人の小き漁舟我等を見恐れ悪慎して去りぬ

次日廿八日ハ曜日ある故水師提督より上陸の免許あり故諸人の内別して我其免許は随へり稍高き巖あり其形情碇網を捲具の形は似たる故「カープスタント」岬崎のと名く此近邊の小堂は英吉利より送りたる医者「ベテレ」イメ此人親族とも、の稍七年来住居此以前「カヒテイ」館マク「ウエ」人其他士官と共に此に到り此離島は人を揚げ置き不自由を堪

ゆると且「カ」ル「ス」ル「ア」ル「ハ」ハ船の事いふの名を英國に帰着の上知らくめ「○」子八百四十七年「上」人といふる醫師小き「スク」子此船の「よ」此所「来」り僅の旅具陸に揚げ速に此廻國人を海路を撰み出船せし「○」爰に於て此窮人二の子供と共に帰る事を得て「○」此濱に在りしが終に此海濱にある小堂に至り一夜を明し土人の恵により食物を得たり「○」土人此旅人の爰に在れ恐を助かり「○」故に彼道具を濱に置し故に流水にて濕透せり「○」市中より

又「シ」ト「ル」

三里程隔し所は「フランスの法徒あるハ」トトル
アド子止人此窮人を己ヶ家ニ留置し然りと
いへども得との僅なる故に此ニ子甚衰なりト
ケ彼等と終に濱邊の小堂を譲らばし此小堂を
今は住居しある所あり○此處は不意に一二艘
の船入港し食物を惠み其後英國の蒸気船
ロイナルト船は香港の「ヒス」プ人を探し此濱
に來りし此節琉球政府の長官より彼貧人の安
全なる事を所置せり夫よりト彼窮人等土人
より是迄の請し所の苦悩を脱し○然れども

医者「レ」以市場其外より法を解くこと我初免
しガ忽ち諸人散乱を此の故に今日迄諸國人の
心と攸免しむる事を得○則此地の人を日本
に於けるガ如く宗旨の事ニ堪へば此国民ハ絶
へむ目付よと注目され一人を異國の説法者よ
就し聽聞する事を得じ
那覇府を大琉球の内よりを盛ふる交易場より
大琉球の中大島の南西に當たる岬崎に在り
○此内港を周圍し石墨を以て是を築き河を以
て是を造る其深き事唐船の爲免し足るなり○

壁ハ石樹の大材より疎々積立接合せるまじ
なり見りけ古きといへともその形容甚よし○
此石壘及び壁ハ大砲を備ふる事なく若らむ
必小砲からむ城壁ハ凡四尺の高さより幅三
尺なり諸々の出碇より小き砲門の櫓あり然し
此小櫓ハ漸々張番一人のゆづある故其砲門
ハ當りく只遠見の爲に用ひしとの成程し
我船の碇泊せし那覇の港を障す半月の形ち
かる入江ありと海手ハ石樹より閉せし鉢形の
處ありと○又此三箇所より通路に其をを南方の

者を通常廣路を用い○市中ハ岸を傳ひ及び内
海をなす所の小河は沿ふ推考せるも人家二万
此町々甚廣ふして大なる石樹材と敷し○外見
よて相應は暮る者のみ住町はを両側は壁あり
其間はを其後は在り家の通路あり○此國民異
人より向く大に驚怖をると見え多り如何とふれ
を國民等木陰横町より窺うひ見るといえとも
然し其者は近奇らむと欲し或は物語らむとす
る様子残見るとき各速に逃去る
我通辨官の取次よて来意を述べ後五月廿九日

琉球政府長官杖船の士官を見舞として本船に
来る其長官と請るよ武の禮を以て待遇し悉く
船中を案内せしめ其長官を威ある老人なり○太
子十二歳の幼年なる故に彼長官國政を支配す
るものなり○また其後者を大槪長髯の老人よ
しく髪ハ上よ梳り頭頂は於て奇麗に結びて節
杖かし其節は字を挿し衣服を細地の切よて廣
き袖をつけし長き「カプタニ」長き廣き打の一種
掛様の物
の物なり身の中は絹の帯や襲ふ是は扇子小
烟草入短烟管を挾む其烟管頭を金屬より其

大き指は過ぎば高貴の人ハ此「カプタニ」の下よ
亦薄皮肌着并膝迄ある廣き股引を着せり此
股を引ハ膝まで届き木綿の莫大小と縫合せる
ものなり但し莫大小別よしく足の拇指を他の
指と分つものなり彼等ハ恐らく丁寧を盡し為
よ沓を端舟に残り置り莫大小の足袋より船中
を徘徊せし我聽ける如く彼等其家よ於てなを
通り成すなり○祝砲をかせし時長官の外大
槩ハ驚我船中よ卧せし
前条の禮式相濟し後「コムモト」官此島中如何

ある場所、亦国の裨益を根元と吟味せん為
め巡見をその致遣ハさむと決定セリ
此巡見者ハ寺の役僧なる、君并司スシス、シッ
ピ山船の茅三等の医官多る、司ハ君且我コ、コン
クハシ号船の人なり又荷物を持去めんが為船
毎より二人の水夫及ひ唐人二人を出しぬ○我
等ハ天幕且八日分の食料を用意しカラベイニ
馬上其他武器を備へり是傷害を防ぐ為なり
五月三十日初々巡見の者那覇を上陸して直様
巡見以初一

那覇の北東は先廣野あり土堤様のもの、是致築
く此ハ是島の舊都府首里への道あり大約一里
餘テ、マ、イと号ハ小河は添ふと至る此河ハ那覇
の港は流き出る此海濱住民三万四千あり此
河はかくりたる橋は近接して寺院は等しき大
かる家あり周圍小厚き壁あり其内は三門あり
常小是を鎖セリ是と寺院あるも亦々貴人の住
所あるも我是を決し能ハズ但し此家を多く用
らまざる事明かり
首里への道一方ハ丘の間は在り稲田を通り又

此丘の上と通は此路を両側は多く木を植え陰
多くして逍遙をるは最可なり此道幅ハ十八尺
又ハ二十尺の者よりして石樹状ふ似り石材と
敷けり○土民ハ稻を植るは暇なく畑ハ畝の形
小よりして不絶水を澤山は洒き潤は水を則少き
植と以て近邊の高き野小引て其水是よりして
依き野は流る故は田地不絶湿润は○先春は稼
き地は米と蒔き此秧程能く生長をぬむ直は是
を植かゆる○或畑よてハ稻穂盛るは他の畑
に比し此業は暇ありり

我等漸那覇府と出し時身分ある士人三人は出
逢ひし此者其時より自ら我等と離るは此國人
の内一人ハ老人外二人ハ年若かりを此内一人
ハ長かき者あり彼等を我等の怪しき異人より
る万事をも業我知らむが為明は送りたり何と
を九ハ我等の所作は気と附万事書留夜るハ三
人其此書苗と細小引合せと為し此後遅く知り
たり我連中の内若し一人離散を九ハ彼案内者
の内を亦一人隨ひし我々の荷物唐人の為は重
くある我知り此内容と合む所の或ハ案内の國

人へ荷と荷ふ事を命ぜり此者勞るまば又余人
に命じ或ハ農業と為る者も命へは是を命ぜら
ゆまむ其否む事なく其業事を止る其命令は隨
ふ并小出の三人のその度々鶏芋野菜類の食料
を世話し其價を取事と欲せば然し我等ハ六日
目ハ那霸小歸りし時医者ノ「ベトルヘイム」ル人
通辨となり能く用と辨せり是迄彼等細密は留
置所の些少の諸勘定と彼者箸へ遺ハセリ
三里の間進る首府の首里に至り此首里の人
家の建方ハ稍大なる柱小て丘の頂上又其斜面

もありと若又ハ城の類は造りさるといへど
も造方那覇と同様の都府の門前の邊小て其導
者我等と休息せしむる為家屋に入らし免んと
案内を○此休息所を國言よてハ「ムニク」ト名
づくるものよりと稍大なる場所あり貴き旅
人を止宿せしむる為のものなり周圍小花壇及
ハ樹木ある庭を越る客座敷に至る此座敷ハ分
家の角小あるありその家を他の家の如く木よ
て造り幅三四尺の丸柱よて是を纏し側面は薄
き木板あり但し此家の角は在る小き分の戸を

融通の爲諸方は聞き除き得べし天氣悪しき時
は其板の代り小油と引し紙にて張りしる障子
の類とてむる床は長六七尺幅三尺厚さ二寸
の和らう小して清浄なる物を敷き人其上小能
く寝るあり

爰は支配する役人一二度身と屈し後手と擲
け至次で僕来ぬり此僕人々へ一つ宛木製の盆
と持来る盆上は瀨戸物の皿及び竹にて製し
たる灰入有り是は烟管と擲出せるものあり筈
二の合圖はく小き茶碗は茶と汲巡まり但し此

茶は自然と唐國の如く牛乳砂糖等加味なすは
然し我等は味甚美しして気を引たる物あり
家の前は大なる桶を設け是より人水を汲み手
顔と洗ふとめ小す人沓と又前座敷は脱置き莫
大小の足袋はく家の中に至る
我等此島中少てを何ましても同旅宿と見多り
亦同様は待遇さぬ
暫時休息の^後又我等出歩し風は翻る旗を以て市
中を通行は町々淋しく人家を閑せり然れども
諸方にて好事のとの我々を見る見多り我々ハ

前後の備ふて旅具を中々備へて進む城中を通
行は此城ハ六七十尺の高き壁にて是を圍ミ多
くの門あり然れども其門悉く閉させり我等見
物と止む危命を聞しゆえ北東に向ひ反對せ
る海岸の方より道取りと再び市中より進み出
田野の景色廣して支那はかけるより丁寧な夫
々の田地植附あり一〇丘の間は各園中の築山
の如く稻田重置あり一一の田より流る出る水
の他の低き田は洒く故肥膏なる田地より多
分の苧納と得る遠見は於て山脉と推考を高さ

九千丈なると知りしは其地は
我等ハ滑るる地を越し暮迄進し〇然る時幕
を張り其上は旗と立番人出張し直は烈火の上
にて我々の夜食炊く其夜食を米菜并我等本
船より持来りし豚肉なり并我途中は射する一
二の野鳩又土人より我々へ與へる鶏蒜鶏卵
等にて此食事と給は前の役人三人のものを周
圍小多の土人と置我等より九三十歩離きて急
速用意せる蘆屋根は備へ居れり

コハモトと「ルリ」官名 小呈し受る書中は此の行の諸

事を載せり彼を宜しき時を以て披くあらむ
○我輩六日の間引續く出行して三日の間東の
濱小宿せり其後北東部大約二十四里乃里の間
此島を横きり行き而して一隊を西岸に沼ふて
へり一隊を土地の形勢に従ひ多分内地を通
りて歸りたる

總て我輩と懇切に取扱ひ且つ其産する所の諸
食料を贈まり殊に鶏、鶏卵、鮮魚、塩、アウギルト、詳
氏、漬葱、芋、庶、多くとくまりの前は屢掲げたる
官人等との返酬の事は就く配意せり然れども

我輩の願ひより終に其算勘と為せり其算を甚
に當れりとの此島の北部に於ては海岸に近
き所のミ田圃を開き山と邱の上より樹木夥し
く生ひ茂り其南部に於ては樹木乏しとて其價
と頗る貴し○最初の夜を除く外を我輩毎に前
小述する「モ」ニク口琉球語なりの内は宿せり其
中一二ハ甚だ愛をべき構造にして實に愉快な
る旅館なり諸館いづれも甚だ清潔にして殊に
館前の地と園庭とを意を用ひて洒掃し川の白
砂と布き入り口の前は毎に水桶と置れり小

柄杓と添え水取杓むよ便ふに丸く入来きる
後直ちよ顔面及み手足と洗ふ為めなり此の顔
と手と洗ふの二事を食事の前後よ必らに惜る
盥らざるをなり○殊よ愉快とすべきハ「ニ
キ、テニ未詳但類」と除く外を少しも小虫の患あ
ることあり

此の島の中部よ往古の境穴数多あり或ハ邱の
半腹と掘りよ造りよるあり或ハ岩石と穿ちて
作りよるあり此れを「テベ地」の古境穴よ異なり
此とありこの境穴ハ頗る濶本室よして口よ對

する壁の岩石よ坐所と截りよる此の古境穴の
模様よ新き境穴と全く異なり而して其新ある
者ハ此の島の他所中部に在りよ大ひよ支那よ
等し死と見より此の居民等ハ大ひよ新墳を尊
敬して古境穴とを甚だ賤しミ惡めり實よ怪し
むべし彼等よ此の古境穴と嘲り笑ひ且譯官
の譯よ頼る小此れと鬼男の境穴と呼べよあむ
又大かる古城の傾崩せると見る其墻の所々今
猶大約七十尺彼止のツの高さありて且つ駿ベ
き厚さあり他の諸城の墻よ在てハ突出をべき

乃部分として其の城の牆は於て其内の方より曲折せしめし其本来の形状を視て明かり城門の屋は甚しく扁平にして大なる截石と以て造りたり其の城は往古覆滅せる人種の時代よりありし其の上の諸状小て詳かり然れども余其の城牆と建する人真に其覆滅せる人種は属せるや否やと説き得むとならむ先づ其の島の諸物及び人民と審み知り並に既小推察せるの外何物もあらぬに至るまで審みせん事と願ふ我輩第六月四日昏後三時の彼時は終に我輩の船

は對せる正面の岸に至るは此時旗を揚げ銃と桑しけきを直ち脚船来りて我輩とシスケハニは船を送り船伴皆悦び甚だ懇切に取扱へり我輩の日記并に火伴の持帰りたる種々の試と呈し其を以てコムモト止甚だ満悦せしと見え多し我輩六日の間は直線にて百八里の彼を歩せし然れども其道路と取る少く左右に避ること數回あるを以て其の里數と二階に算して可なり○漸く島の半を過ぎまで探索し而し

て第一「アメリカ」の旗を立て島の最も高き所
に挿し「アーラ」詳未及び祝砲を以て祝し及び總て
平地の諸物と居民と望み並に我輩がよめ小航
過せる火伴一人を視多り

余島の島の地取を視るに第一砂石多し北方
小を粘土及び「レイ」詳未多し其餘ハ「ガラニ」止
の堅石と「クル」同と見る但し島の所は来りし比
に我輩の定約より右方に向き行たり海濱を石
樹珊瑚等の石樹と撤らえ而して全岸ハ石樹と以て圍
統せり○良木は黄松あり殊に北方は夥しく

して且つ最も高き者あり○牛ハ少くして豚ハ
最も夥し山半及び鳥類ハ多からん氣候ハ一二
日を除くの外ハ甚し好和にして「ハ」レニヘイ
ド氏の驗温器よて七十五度と九十度の間小あ
り但し夕の九十度ハ最も稀なり水ハ総て良好
あり海岸処々の小港ハ何れも碇泊するに最も
と



